

想い、 ～使う人のため、良いものを～

荒川河口から約35km上流に位置する秋ヶ瀬取水堰は、首都圏の慢性的な水不足を利根川からの導水により解決するべく建設された。水不足のピークは東京砂漠と呼ばれた昭和39年である。

荒川の水と武蔵水路を介して運ばれる利根川の水を東京都や埼玉県の水道用水、工業用水および隅田川の浄化用水として使用するために取水を行っている。

オリンピック東京大会が開かれた昭和39年の通水開始から約半世紀経過した現在、大規模地震に備えた耐震工事を実施している。本号では、工事に携わる若き土木職員を取材した。

新築・改築の仕事

「通称“工事班”として、工事の積算、発注、工事監督などを担当しています。現在の主な仕事は、工事監督です。」入社して6年、4カ所の事務所でダムの新築や水路の改築に携わっている齋藤さん。管理事務所が多い現在の水資源機構では珍しい存在かもしれない。職員4名とシニア職員1名の合計5名で、秋ヶ瀬取水堰の耐震補強工事など5件の大規模地震対策工事を担当している。「今は大規模地震で既存の水路に不具合が生じた場合においても、必要な水量を安定して届けられるようバイパス水路をつくっているところです。」円滑な工事進捗のためチーム全員が対応できるよう、こまめに工事現場を班全員で確認す

Profile

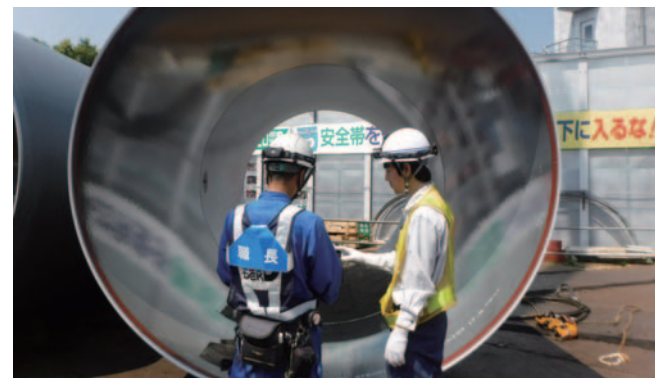
利根導水総合事業所 秋ヶ瀬管理所

齋藤 拓也 Takuya Saito

平成23年4月入社、両筑平野用水総合事業所、思川開発建設所、武蔵水路改築建設所と建設・改築事務所を経験し、平成28年1月より現職。



るよう心がけているという。「工事監督として、受注者から即座に判断を求められることも少なくありません。知識や経験が浅いことは言い訳にならないので、的確かつ迅速に判断できるよう普段から知識の習得等勉強することを心がけています。とはいっても、正直まだまだ先輩や上司に甘えてばかりで、反省の毎日ですね。」日々施工が進んでいく中で、5件の工事現場全ての状況を把握し監督することは想像以上に難しいようだ。「工事をしていても、必要な水を常に流し続けるのが私たちの管理する水路です。水



を流すことは止めることができません。出水期(6月～10月)は河川内施工ができないことがあったり、工事に伴う通水の切替においても色々な制約があるので、工程管理も難しいです。」と日々奮闘中の様子。

目指す将来像

「入社以来、新築・改築の工事を担当しているので、事務所が変わっても内容は似ていると感じています。とはいえ、対象物は現場によって特有のもので、日々勉強・日々経験の積み重ねです。」建設のプロフェッショナルを目指しているのか、描く将来像を訪ねた。「流れに身を任せている、というのが正直なところですが…。契約や予算、管理などの実務をこなしてこそ、建設事業のことを理解できると感じています。自分は経験が浅いので、覚えなければならない知識がまだまだあります。様々な経験を積んで土木の技術者として真の実力を身につけていきたいです。」と、これから出会うであろうたくさんの新しい仕事が楽しみでもあるという。



先輩の言葉を胸に

学生時代、水資源機構で働いている先輩から話を聞き、仕事に興味をもったという齋藤さん。全国転勤で色々な土地に住み、色々な場所で経験を積むことができることに魅力を感じたという。「転勤の間隔が2～3年と比較的短いのも、色々な施設での仕事が経験できて良い点だと感じています。」齋藤さんは水資源機構の魅力をそう語る。「でも、結婚して考え方が変わってきました。現在は“水系単位の異動が基本”といった本拠地の選択ができる制度に変わり、家族をもった際にでも生活設計がしやすくなる環境が整備されつつあり良かったな、と。」また、入社し



てさらに感じた魅力もあるという。「何より感じたのは、働いている職員の魅力です。」と力を込める。「同期入社で土木職は自分一人でした。配属先では、友達もいないし、これといった趣味もないので、不安なこともありましたが、相談できる人が職場内に沢山いたことで支えられました。工事の検査や変更作業が重なる年度末は忙しくなりますが、先輩に叱咤激励されながら遅くまで頑張ったこともありました。大変でしたが、今後仕事を続けていく上で必要な経験だったと感じています。熱心に指導してくれた先輩方に感謝です。」と当時を振り返る。「先輩の話をよく聞く、調べて分からないところは確認する、迷ったときはなるべく抱え込まないよう相談する」ように心がけているという。「自分は本当に、周りの方に恵まれて、今まで頑張れていると感じています。自分自身もこれから入ってくる皆さんにとってそういう存在になりたいです。」と最後に語った。

取材時、心に残っているという、ある先輩の言葉を、何度も口にしてきたのが印象に残っている。

「これからの人のために、使う人のために、
良いものを造りたい。」

その言葉を胸に、齋藤さんは今日も仕事に励んでいる。



結婚して1年。外食続きの社会人生活だったが、現在は奥さんの手料理を楽しみに、仕事を頑張るなど、公私のメリハリに工夫しているという。「週末は今の勤務地を満喫すべく、夫婦で近郊を巡っています！」とはにかみ笑顔。